

題 目 : 不公正是正行動における他者期待が果たす役割

氏 名 : 濱田 光

指導教官 : 高橋 伸幸

これまで集合行動に関して様々な研究がされてきたが、集合行動が「集団で共通の利益を達成するものである」点ばかりに注意が向けられ、ある集合行動が「不公正感を生み出す状況を改善するためのものである」という点や、不公正感を生み出す状況において集合行動が生起される理由については十分な考察が行われてこなかった。この点に関して竹澤(1999)は、不公正な状況の改善を伴う集合行動と通常の社会的ジレンマ状況とで、人々の協力行動の違いを検討し、不公正感を伴う社会的ジレンマ状況においては他者の協力に対する期待が生まれ、そのため、協力率が高まると主張した。

しかし竹澤(1999)の研究では、不公正感を伴う社会的ジレンマ状況において他者の協力に対する期待が生まれる点は指摘されたが、その理由について十分な検討が行われていなかった。つまり、他者の協力に対する期待が、不公正な状況が全員の間で共有知識として認知されている場合に生まれるのか、そうではなく、共有知識となっていなくても生まれるのかについて十分な検討がされていなかったのである。

そこで本研究では、集合行動における不公正是正行動について、同じ状況の認知が他者との間で共有されているという認識、つまり二次のレベル以上での共有知識の働きについて検証を行った。具体的には、a) その解決に不公正な状況の改善を伴うことのない社会的ジレンマ状況、b) その解決に不公正な状況の改善を伴うが、全員が不公正な状況に置かれていることは実験参加者個人しか知らない状況、c) その解決に不公正な状況の改善を伴い、かつ、全員が不公正な状況に遭っていることが、実験参加者全員の共有知識として知らされている状況、の3つの状況を設定して協力率の比較を行った。

実験の結果、a) よりも b) が、b) よりも c) の協力率が高いということが示された。以上のことより、不公正な状況を改善するための集合行動において人々が協力行動を選択するには、1) 同じ状況の認知が他者との間で共有されているという認識の下で生まれる“「他者の協力に対する期待」の期待”つまり二次のレベル以上での「他者の協力に対する期待」、また、それによって生まれる、2) 他者の協力に対する期待、つまり一次のレベルでの「他者の協力に対する期待」が必要であることが示された。